

武家の古都・鎌倉シンポジウム

基調講演〈要旨〉

「世界遺産登録の現状と鎌倉のいま」



鶴見大学文学部
文化財学科教授
前文化庁主任文化財調査官
伊藤正義さん

世界遺産というのは、ヨーロッパがスタンダードで、建造物が中心です。日本でそれが大きく変わったのは、原爆ドームの指定のときです。建造物を指定してきたこれまでと違い、廃墟を指定するための理論づくりが必要でした。アメリカとぶつかることを避けようという政治的判断から、原爆ドームと厳島神社を、ひとつの県から二つ一緒に世界遺産登録することにしました。ここから世界文化遺産は建造物中心から記念物中心にシフトしていきます。

鎌倉と同じカテゴリーで、古都京都の文化財、古都奈良の文化財があり、建造物の優品の集合体です。鎌倉はその点明らかに何段階もレベルが下がります。奈良は埋蔵文化財として平城京跡、春日神社の背景を成す春日山原生林を含めた統合型、複合型文化財として登録しました。

木造建築である社寺は部材を取り換えていきます。それをどのように説明するか。木の文化の東アジアでは、同一の技法、同一の素材で修理していけば、真実性は減じないことが認められています。沖縄の琉球王国の遺産は戦争で壊滅状態になりました。首里城もすべて復元で、新しく作られたレプリカです。中世のものがほとんどない鎌倉に近いのですが、登録には大きな抵抗がなくすんなり通りました。

日光の社寺は2社1寺で、周辺の土地も指定しました。当時の日光は観光客減少のため何とか地権者の同意が取れたが、鎌倉は今でも観光客があふれています。

新しいカテゴリーとして熊野古道が出ました。紀伊山地で「文化的景観」というものが初めて出ました。

石見銀山は大変難しい状況でした。石見銀山が最初不適格とされた理由のひとつは、登録の必要性として挙げていた石見銀の世界への流通について、当時日本に来ていたポルトガル人とスペイン人以外あまり知られていなかったことです。それについての危機感を日本側が持っていなかったことがあります。それを補完するものとして挙げたのが「鉱山経営と環境保全の政策」により創出された文化的景観です。これは実を言うと日本側が用意したものではなく、島根県のシンポ

ジウムで外国のパネラーが評価したことでした。

鎌倉の場合も、都市という言葉を使っていいかなど、常に世界に受け入れられるかを検証することが必要です。また平泉はセールスポイントを単純明快な論理構成にして成功しました。寄木細工は非常に危険です。

正しさは常に相対的なものです。世界遺産の基準も常に変化している。過去の成功例にはこだわられません。以下、鎌倉の登録について私の経験と役所で考えたことを、樋口忠彦さんの本『日本の景観』（ちくま学芸文庫）を基にお話しします。

鎌倉の景観は背後に山を背負っている「蔵風得水」の地、四神相応の地です。樋口さんによれば、この景観は人間にとって最も快適で、母の胎内から眺めているのと同じ眺めだといいます。鎌倉の景観は特徴的ですが、従来の城塞論には反対です。平和な空間、住んでいる人間が安心できる空間だと考えています。

鎌倉の範囲はどこまでか、およそ西は片瀬といい、江ノ島縁起では龍口寺を龍ノ口であると書いてあります。安全を保障しているのは鎌倉を取り巻く山です。本当に鎌倉の地形は龍体に見えたのでしょうか？

最後に樋口さんがまとめておられるのは、時間だけにこだわっていると、ついつい細かいことや目に見えることだけに目を奪われてしまいます。生き生きとした生活環境を忘れてしまいかねない。武家の安心できる、だれもが安全だという地形環境をこれ以上壊すことは一切やめなければなりません。

現実に住むのをやめることはできない。都市化したなかで、皆さんが心安らぐような景観に変えていく。それをやりますということを世界にアピールしていく。山と若宮大路、山に囲まれ谷戸に住む都市。武家の政権を守護する、私流に言うと、龍神が取り巻いている誰もがあこがれる都。武家が暴力集団であることは間違いないが、片方に暴力、もう片方には平和を望む母親のような心を持っていた。誰もが鎌倉に来るたびに、山々に囲まれているというのは、本当に心が安らぐのです。世界遺産登録を申請するときに、山々に囲まれた景観の素晴らしさと、こういうふうな仕組みで山の景観を向上させていきますということを、今度の申請書にいれることができれば、私は世界遺産にすることができるのではないかと思います。

もうひとつ、市民の皆さんへのお願いは、石見、平泉から鎌倉へ、次にめざす都市へと、登録経験を大きな遺産として引き継いでもらいたい。駅伝スタイルでタスキを渡し、タスキが切れることのないようにつないでいってもらいたいと願っています。(了)